

大型類人猿ボノボに対する住民意識の多義化

-コンゴ民主共和国民族集団ボンガンドのボノボに対する

食物禁忌とその変容に着目して-

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻
博士課程五年一貫制 4 年（助成時）
博士課程五年一貫制 5 年（現 在）

横塚 彩

【研究の背景とボノボ】

大型類人猿の一種であるボノボ (*Pan paniscus*) は、コンゴ民主共和国の固有種であり、コンゴ川左岸にのみ分布する。2 度の内戦による深刻な貧困や食料不足の影響で、密猟が拡大し 1996 年以降、国際自然保護連合の発行するレッドリストで絶滅危惧種に分類されている。コンゴ国内では複数の民族集団が、伝統的知識からボノボの肉の摂食を回避してきた。しかし近年では、特に都市部に出稼ぎにでた若年層世代に、ボノボ肉への摂食回避の伝統継承が薄れつつあることが分かった。近年のボノボの個体数減少への緊急な課題として、ボノボへの伝統的文化の崩壊による密猟増加があげられる。

【研究の目的】

本研究の目的は、ボノボを摂食回避する文化を持ってきた焼畑農耕民ボンガンドを対象に、彼らが持つボノボに関する知識や経験に着目し、ボノボとの共生関係が保たれる文化的構造と、そのタブーの崩壊に至るメカニズムを解明することである。

【研究方法】

コンゴ民主共和国チュアパ州およびチョポ州のボンガンド居住地域 6 箇所に住み込み、合計 763 人から聞き取り調査を行った（2014 年からの累計）。1 村は、1992 年に制定されたルオー学術保護区内に位置し、その他の 5 村には保護区の設置や外国人の居住はない。

【結果】

保護区内の村では、ボノボの摂食経験は 4.0%なのに対し、保護区設置のない 5 地域では、23%に登った。L 村では、45.9%の人が摂食経験を持っており、他村では、摂食経験者が主に若者（20-40 代）なのに対し、L 村においては、全ての年代で 10%を超える結果となった。

また、LM は、保護区の設定がないにもかかわらず、ボノボの摂食経験があると答えたのは、わずか二人にとどまった。

ボノボとの遭遇経験を比較すると、保護区内の村では遭遇経験が 90%を超えた。調査を行なっていて印象的だったのは、熟年層（60-70 代）の人々は、ボノボとの森での遭遇経験がある、しかしボノボを食べない、若者層（20-40 代）は、ボノボとの遭遇経験がない、しか

しボノボを食べるという構造がみえてきたことだ。村人がボノボを禁忌とする理由を述べる
とき、人間との身体的特徴の類似性が挙げられることがおおい。しかし、現代の若者にとっ
ては、遭遇経験も少ないことから、ボノボの肉の摂食に関して抵抗感が薄いのもかもしれない。
また、ボノボの肉の入手方法に関する調査を行うと、キサソガニなどの大都市ではなく、自
分の出自の村、もしくはその近隣の村から入手していることがわかった。今まで摂食経験が
ない村人でも、ボノボの肉が販売されている場面に出くわすと 50%以上が、購入していたこ
ともわかった。LM と保護区内の村を除いた 4 村では、ボノボの肉の狩猟と販売に関する、
その地域限定の“ローカルルール”が存在することがわかった。猟師はボノボを殺しても村
長や首長にボノボの肉の一部（頭部や大腿部）を贈与すれば、警察に逮捕されることはない
という。しかし、LM では、ボノボを殺したら、猟師は逮捕されるそうだ。LM では、多くの
人がボノボの肉を摂食しないので、首長や村長もボノボの肉を食べないのかもしれない。

【考察】

保護区内に居住するボンガンドのボノボに対する禁忌と、保護区に設定されていない地域
でのボノボに対する態度は、特に若い世代で大きく異なっていた。調査村全体をとおして、
60-70 代のボノボ肉の摂食率は低いにも関わらず、20-40 代の摂食率は高かった。村人の語
りから見えてきたのは、戦前はコーヒーやヤシのプランテーションが各地域に点在していた
ことと、学校教育が重要視されていなかったため、村人は最低限の収入だけで暮らしていく
ことが可能であった。しかし戦争の影響により、プランテーションの撤退、インフラ整備も
依然整わない状況から、人々は仕事や物を求めて街に出始めた。街では多様な民族がボンガ
ンド同様に収穫労働に来たり、商品の買い付けに訪れる。村にはない食文化や、商品が大量
にある街での生活で、ボノボの肉を手にする機会があれば、摂食を回避することは困難な
のかもしれない。また若者は好奇心から、今まで摂食経験のない野生獣肉を口にすることも
しばしばあるようだ。話を聞いていると、一度収穫に出ても、村人はある程度のお金を手
にすると村に戻ってくる。ボノボ肉への抵抗感の薄れた若者が、狩猟の際にボノボを殺し、
村内で消費する。村から出た経験のない熟年層は、やはりボノボの肉は摂食しない。そう
いった構図が、今回の調査で改めて浮き彫りになった。

保護区に設定されていない村でも、保護区内の村のように、ボノボへのタブーが守られて
いる地域があることがわかった（LN 村）。LN 村は、中規模な町から約 50km に位置していな
がら、摂食経験者がわずか 2 人（N=122）と、他 4 村の保護区外の村と比較すると、LN 村
の摂食回避傾向はある意味異質な印象を持った。摂食しない理由としても、外部的要因を挙
げることではなく、先祖からの禁止と言う回答が上位にあがった。保護区外の調査では、ボノ
ボのタブーに対する文化的要因が薄れているように見えたが、LN 村のような地域も未だに
存在するのかもしれない。現在 60-70 歳代の人々は、伝統的な食物禁忌から、ボノボの摂食
を回避し、ボノボとの程よい距離を保ちながら、森の利用を行ってきたと考えられる。しか
し、住民のボノボへの態度は今、大きく変わりつつある。ボノボの密度が高い内陸地でのボ
ノボ保全を考える時、生息地破壊への懸念も去ることながら、そこに暮らす人々の意識の変
容が重要かつ困難な点になりそうだ。